

轉地療養者の或日

一、二、丙 佐々木 高 遠

上

「ポンプの音はいゝものだな」と彼は毎朝考へることを例の通り心に繰返してゐた。シヨク／＼シヨク／＼と朝の清らかな海岸の空氣を縫うて靜に規則正しくポンプの音が響いて來る。あれは彼の借つてゐる家の斜向側に當る水族館のポンプである。……：……：明方になると、東の空が徐に白んで來る様に彼の眠りも段々薄らいで來る。とりとめもない夢が夫れから夫れへと續いて意識が次第に明らかになる。そして最後には定つてあのポンプがシヨク／＼と澄んだ爽かな響を夢に絡ませ始めるのだ。始は何の音が全く分らない。よく聞く音の様ななど思つてゐるうちに益々近く聞けて來る。そしてやつと「俺はT海岸に轉地して來てるんだ。あれは例のポンプだ」と思ひ出すのである。思ひ出しても此の頃は暫時は眼を開かないで、じつと耳に注意を集めてゐることが多い。夢と現の境目のボンヤリ霞んだ頭に例の音がシヨク／＼響いて來るのは何とも云へぬいゝ氣持だ。乳白色の濃霧を通して鈍く朝日の白光が匂うて來る様な感じである。やがて室一つ隔てた勝手の方で庖丁を叩く音や水を流す音が突然意識の表面に浮び出て來る。もう眼を開けようかと思ふ、いや／＼もつと閉ぢてゐよう、何だか眼を開けるのが惜しい様だ。眼を開けさへすれば現實の外光がバツと攻め寄せて來る。そして新に物倦い一日の幕が切つて落されるのだ。俺は此の薄い膜一重で新しい日の潮をせき止めてゐるのだと思ふ。何だか其の事が大事件の様に考へられる。もう暫くしたら母か女中が雨戸を開けて

起しに来るのだ。それまで眠つたふりをしてゐよう……。此の頃はよくあのロシアを象徴したものだと言はれる「オブローモフ」のことを思ふ。彼も怠惰の習慣から手一つ動かすのにさへ色々煩悶した後でなければし得なかつたさうで、時には寢椅子の上で寢返りしようかすまいかと一時間もじつと考へてゐたりしたと書いてある。俺も何だかオブローモフに近い様だと思ふ。そして枕許に例の通り置かれてあると知つてゐる新聞をも手を蒲團から出して取るのが臆劫さにじつと取らないでゐるのである。

「もう起きないかね、七時半だよ」と母が起しにかゝる。あの薄のろの女中だつたら「うーん」と大きく呻つてやらうと思つてゐたが、母だつたから知らぬふりをしてゐると、又繰返して云ふ。黙つてゐたら何度迄位繰返すつもりだらうと考へる。然し三度目には煩くなつてバツチリ眼を開いてしまつた。母が笑つて「さめてゐたんだね」と云ひ乍ら雨戸を開けにかゝる。

「今日は少し波の音が高い様ですね」
「あゝ、海も荒れてる様だね……。それに小さい雨も降つてるんだよ」

母はこの小さな家の雨の日の籠居が如何に退屈であるかを熟知してゐる。母の聲には明に困つたと云ふ様な表情が籠つてゐた。彼は夫れを感じる。「なかに困りはしない」と心の内で反對してみた。だが今日は一日寢てゐようか、うつら／＼眠つてはさめ、さめては眠る、そしたら其の眠りと眠との間を雨の音が蕭々と夢の様に綴り連ねるだらう……。然し次の瞬間にはさう考へ乍らも起きてしまつてゐた。

彼の最も苦痛なのは食事の時間である。ちやんと六時間おきに出されるにも拘はらず一向食欲がない。母の丹精をこめた御馳走も餘り咽喉へ入らぬのである。茶碗一杯を平げるとホツと太息してヤレ／＼と思ふ。

時には一杯の飯が何時迄経つても減らぬ。彼はじつと見乍ら思はず太息を洩らすのである。

「そんなにいはいないならもうお止し。ほんとに辛いねわ」と母が口を出す。「辛いねわ」は「困るねわ」が此頃進化して變つて來た言葉である。

鹽て八百屋の娘が注文文きに來た。此のあたりには三四軒しか家がないので一二町隔つた町の八百屋から買ふのである。「ほんに困つた御天氣でございます。今日は何を……」と例の調子で玄關から尋ねる。せうとなしにオルガンを弾いてゐた彼は、冗談の相手でも見出した様にいきなり、「いゝ天氣だね」と聲をかけた。「ホ、ホ、」と母の注文を聞き乍ら彼女は笑つた。「冗談ばつかし……」

窓硝子を透して雨の中を歸つて行く彼女の後姿が見わる。未だ十六ださうである。色の白い細面の一寸可愛い娘だ。だが未だ浮世の波にもまれない一人の純な少女としてみてゐたあのうぶな娘が、八百屋の實の娘でなくてその總領に嫁入つて來てるのたと聞いた時は、かなりの驚きと共に、まごもに現實を突き付けられたことに對して尠なからぬ幻滅を感じた。無邪氣な蓄をなせそんなに殘酷に取扱はうとするのだと腹立しい氣持さへ起つた。だが夫は去年からとか入營してゐるんださうだ。金の入らぬ召使として、早く子の嫁を貰はうとするのも成は已むを得ないことかも知れない……

彼はオルガンにも飽いて座敷の縁側に立ち乍ら、じつと雨を眺めてゐた。小さい雨が灰色の空から殆ど音も立てずに降つてゐた。水族館の柵や庭園内の松の樹、緑の畑を越えて遠く濱の砂丘や低い篠藪、松原と其の中に佇立してゐる焼場の赤い煙突、總てのものを罩めて、折々斜に掠める風の爲め水煙りを立て乍ら大地に吸ひ込まれる様に降り注いでゐる。彼には雨が何だか地面の下でも空間と全様に下へへと落ちてゐる様に思

はれた。彼はかうしてボンヤリいつまでも雨に對してゐたが後には單調に無變化に黙々として降る雨が物足らなくなつて來た。今魔術で突然引力を止めたら雨は丁度歩んでる人が寫眞で片足上げたまゝ止つてる様に此の儘じつと空に懸つてるだらうと思つた。その長い水滴の連鎖が水晶に變つて、夫れに皎々たる陽光が放射したらさぞ美しいだらうと思つた。彼はいつか寶石の宮殿を夢みてゐた。紫水晶の圓柱が連つてゐた。大理石の女神の大きな像が蛇紋石の階段の前に立つてゐた。そして夫等の間を薔薇色の軟かい光線と馥郁たる芳香と微妙な音楽が錯綜して流れてゐた。それから其の水晶柱の廊下を古代埃及の兵士がきらびやかな装ひをして槍と楯を提げて歩んで來るのだと思つた。然し其の際勝手から響いた微かな刺戟がブツツリ妄想を破壊してしまつた。彼の前には依然として細い雨が蕭々と降り續いてゐた。だが其處には以前と異つた或物があつた。小さい黒い影が左手の松原から轉げ出て海岸への畑中の路を辿つてゐるのが見ゆる。正しく轉がりつゝあるのだ。足と身体と均整を失つた其の不安定な急ぎ方はどうしても普通人の足取りではない。曲つた此方へ來るのだ、水族館の横の道を黒い柵に沿うて急いで來る。もう五十越した婆さんだ。一体どうしたと云ふのだらう。あの皮膚のたるんだ顔の異様な緊張は。あの放心した様なその癖物に慄へてゐる様な眼は。喘ぎ乍ら小さく開いた傘を傾けて着物の濡れるのも覺えずに雨の中を小走りに近づいて來る。彼は其の近づいた婆さんの顔を見た時は恐ろしくなつて室に引き込んでしまつた。血走つた眼、青い顔、亂れた髪！

聽て其の女は門の前を往つたり來たり／＼して思ひ惑つてゐる様であつたが、思ひ切つて玄關近く入つて來た。

「あの一寸御尋ねしますが、私の息子が、あの三十位の軍服着た男でござすが、此處を通りはしまつせんぢ

やつたるか、今日でございます、今朝の事でございます。あの何時の間か居なくなつたので……、その暫く前から精神病でござしたが……」

「ほんとに御氣の毒でございますが御見受けしません。先刻も男の方が二人尋ねて御出になりましたがねね分らないので、あちらの方に御出でになりましたよ。どうなさつたのか存じませんが御心配ですわね」

「はい、では、さよなら」とキョト／＼して御辭儀もそこ／＼に出て行つたが、六七間先の道に出るとまた間違々々してゐた。精神の錯亂した哀な婆さんの上を掠めて、燕が一匹雨中をスー／＼と飛び翔つてゐた「先刻つて何時？」と彼は母に問うた。

「未だおまへか寝てた七時頃だよ。大丈夫と云ふことで昨日退院して病院前の旅館に泊つてゐたんだつてよ夫れが今朝の四時と六時の間に見えなくなつたと云ふことだよ。可哀さうにねね」

「死んだのだから」

「分らないねね、松が多いから首でも吊つたか知れないよ……。可哀さうにあの婆さんまで發狂しはすまいかねね」

母は何氣なくさう答へ乍らあの「坂田」の事を思ひ浮べてゐた。もう數年前の事眞暗な夜半に某寺院の松の樹などのある所を、彼女が夫と共に今にも彼の首吊り姿に出會はしはしないかと云ふ豫感に慄へ戦き乍ら探して歩いたとがあつた。然しその恐怖丈は幸にして無駄だつたが彼は案の上屍骸となつて歸つて來た。「坂田も可哀さうな男だつた」と泌々彼の女は考へた。

「坂田の事が今更乍ら思ひ出されるよ。もう死んでから何年になるかねね」と思はず口に出したが、彼の顔

を見ると一寸狼狽の色を現した。

「さうですね。あれは何病でしたかね？」と答へる聲こそ平氣を裝つてゐたが、彼の沈んだ顔には何とも云へない暗い寂しい影がさしてゐた。

「心臟病だつたよ。……だがもうこんな話は止して讚美歌でも唱はうね。おまへオルガンをお弾きよ」
「わゝ」と彼は氣の進まない生返事をした。

其時先刻の八百屋の娘が「御免なさいまし」と云ひ乍ら入つて來た。彼の女は妙に音樂が好きで、注文の品を届けに來た歸りや時には子守旁々やつて來てはよく彼のオルガンをひくのを聽いた。折々は母からそんな時に讚美歌を習つたりして喜んでゐた。彼は誰一人訪ねて來るでもない淋しい假寓に彼の女の罪のない顔を見るのが一つの樂みとなつてゐたのである。

「オルガンば弾いてつかあざつせんな」と云ふ聲に、彼は母の手前、進まないらしい風を裝ひ乍ら、夫れでも直ぐ「ぢや弾かうか」と云ひ乍らオルガンのある次の室に立つて行つた。

母は一寸滑稽な皮肉な感じを起したが、兎に角助かつたと思つた。そして病人の扱ひ難いのを今更強く覺わさせられたのであつた……………。

下

雨はもう止んでゐた。彼は漸く籠から開放された小鳥の様な悦びを以て濱の砂山に上つてゐた。晝すぎの初夏の内海は灰色の空の下に重々し氣な鉛色の波のうねりを其の小山の足元近く運んでは又退いてゐる。左手には水族館の剝げかゝつた水色ペンキの二階建や廣い庭園が眼下に横つてゐて、池邊の花菖蒲の柳や松等

の布置に對して或は紫或は白ときれいに咲き亂れてゐる様が曇り日のせい、か思ひ做しか如何にも靜かな落着きを見せてゐる。右の方を見ると暗褐色に濕うた砂地續きに青黒い松原が蟠つてゐた。あの奥の氣味悪く茂つてる所は俗に觀音松原と呼ばれてゐる所だ。何か祠でもあるのか知れないが、あまり此のあたりの人でも行つて見ないらしい。

海の上には二三の帆が磁石に吸ひつけられた鐵片の様にじつとしてゐた。夫等の上を時折鷗が大きく圓を描いては波にすれ／＼に飛んで行つたりした。空中の王者の様に悠然として空を翔る鷗を見ると一種名狀し難い「自由」ごでも云ふ様な感情が湧いて來る。彼は何かしら物足らない空洞くうどうの心、青春の孤獨感を胸に抱きしめつゝ其の自由な鷗の姿を眺めやつてゐた。そして何物に對してとも分らない憧憬の念の湧き來るのを覺ゆる年ら、いつか彼は二年許り前太平洋上で謎の死を遂げたS氏の事を想ひ浮べてゐた。もう六年前だ、彼が中學一年級の折S氏は五年級で一年級の躰操の指揮をやつてゐた。十人許りより成る一分隊宛を五年生は訓練してゐたが、S氏が彼等の分隊に號令してゐた時「此の中に片手丈振らない人がある」と云つたことがあつた。彼は何氣なくそんな人があるのかなあと思ひ乍ら相變らず行進を續けてゐたが、後S氏が彼の側に來て先刻の注意を繰返した。驚いて氣付くと確に彼は片方の手だけはブラリと下げたまゝで歩いてゐた。彼は其の時自分の愚さに覺えず赤くなつたのを今でもよく記憶してゐる。S氏は友達の所で知り合ひになつてゐたのだつたが男らしい秀いでた眉目を持つた人で体格も極立派な人だつたが、後商船學校の練習遠航の途上に肋膜炎に罹つたと云ふ話だつた。そして暫くして其の投身自殺の報が新聞に傳へられた。「己が病氣の悲觀に加へて郷里には發狂せる兄や繼母繼妹ありて家庭の事情面白からず云々」と云ふ臆測が出てゐたが、後S氏の

親友の知つた所によるとかうである。病も快方に向つてゐたし前後の日誌にも夫れらしい形跡は認められない、投身したのは夜の一時から三時迄の間で船室の窓かららしい。或は船によくある事實だが月明に誘はれて發作的に投身したものだらうと船醫は判断した。S氏は水泳の達人であつた、ブラチナを溶かして流した様な洋上の満月の美しさに思はず知らず白いペットを脱け出で、放心した様に窓から眺めてゐた。そして廳でハツと氣付いた時には過ぎ行く黒い船影に残されてひとり冷い波間に漂つてゐた。衰へてはゐても水泳の道は忘れない、聲を限りに船を呼びつゝ、銀色の波の上に追ひつかうと泳ぎあせる彼を後にして、船は黙々として遠のくのである。自分は愈々死ぬのだと悟つた時をも彼の心にはどんな思ひがした。らう……一二時間の後皆が驚いて船を返して舊の航路を探した時には、もう波は何事も知らぬかの様に只月光に輝いてゐた……。死んだ前日のスケッチブックには洋上を翔る鷗が如何にもゆつたりと描かれて、傍には一首の歌が書かれてゐた。文句は忘れたが、何の蟠りもなさうに自由に飛翔する鷗に憧憬の念を寄せたものだった。彼はS氏のことを不圖考へ乍ら、不本意に死なねばならなくなつた折の全氏の心境を想像して、堪らなく淋しい感じに襲はれた。……あゝ死よ！何と云ふ恐ろしい事實だ。何と云ふ殘忍な脅迫だ。俺も身体がかうして段々衰弱して行く。病巢が次第に擴つて行く。そして最後に運命の神は無情にも冷い手を擴げて迎に來るのだ。死は一切を虚無に導く。親や姉妹は俺を忘れないだらうが俺が死の瞬間から永久に地上より消え失せることは争はれない。十有幾年の歲月の勉學や生活を空しく胸に秘めて再び來る折のない人生から引き離されるのだ。どうして夫れに堪へられようか。俺は一片の墓石の果敢なさを知つてゐる。一片の紀念碑の空しさを知つてゐる。世上に馳せた赫々たる名聲も初夏の陽に映ゆる虞美人草の様にあでやかな戀も竟

に結びては消ゆる泡沫であることを辨へてゐる。此の世の中が如何に理想と懸け離れ矛盾不調和に充ちてゐるかを感せぬではない。而も俺はどうしても死ぬことは出来ないのだ。この弱い死にかゝつてゐる俺を杖柱と頼んでゐる父母がある、はらからがある。彼等の歎きを思つてもたまらない。けれどもよく考へるとやはりその爲ではない、俺は俺自身の爲に死んではならないのだ。俺は天から或使命を賦與されてゐることを信じてゐる。此の使命を果す迄は息が絶へても死ぬことは出来ない。いや假に使命を持たぬとしてもそれでも俺は死に得ないのだ、どうしても死ねないのだ……。

此の時後の方から低いオルガンの音が洩れて來た。物悲しい調子、遣瀨ない様な心細さだ。

やすしや

かなしみにも

主のふどころは

やすし……………

やすしや

見ぬゆゑにも

主のしりませば

やすし……………

母がどんな心であの讚美歌を弾いてゐるかは彼はよく了解することが出来る。堪へがたい不安と悲哀を神の愛の胸に解かうとするのだ。「御心に任せ給へ」と辛うじて低く呟き乍らも、一方には「是非とも全快する様に」と祈つてゐるのだ……。あゝ俺の病弱故にぞれだけ親を苦しめることか、いけれども、神の愛を信ずる母は總ての物を否定した——夫れは自己を知らぬ愚かな試みかも知れないが、あらゆる因襲的權威を破壊して自己の批判の上に新たな世界を築かうとして苦しんでゐる——俺よりも遙に幸福なのだ。俺も天地間の源をなせる或偉大な力の存在を信ずる。然しどうしても此の力に昔信じてゐた神の姿を人格的智情意を結合させることが出来ない。人生なるものを愛の神慈悲の如來が全力を傾けて創造し親心を以て育んでゐると信じようとする時俺にはいつも疑問が起つて來るのだ。そして人生は寧ろ所謂盲目的意志の發現ではあるまいかどさへ考へる。不合理なるが故に之を信ずると云ふ態度には俺はなれないのだ。俺も感激した時や淋しい時絶しい時などは覺えず神に祈念する。然し後ではいつも弱い爲に神の愛を捏造して安價な慰安を求めないのではないかと云ふ考へを脱し得ない。どうかして早く神を信じたいと思つてバイブルを讀んで見たり牧師などの訪問には喜んで話を聽いたりする。然し羨ましいとは思ひ乍ら俺はいつも船に残されたS氏の様にひとり波間に漂うてゐるのだ……。

ふと二三軒隔てた向ふの二階建を見ると、欄に例の幽靈の様に瘦せた青い女が丹前を纏うてオルガンに耳を傾けてゐる。「妾も今一度オルガンが引ける様になりたい」といつも云ふことを附添の人から聞かされたが、もうあの女も長くはあるまい。肺病の上に心臓病がひどいそうな。だが心を盡しての望みも願ひも總て空しく焼場の煙と消ねばならぬとは何と云ふ悲惨なことだ。……だが一躰人生とは何の爲にあるの

だ。進化に進化を重ね文明に文明を積んで行つて一跡何をしようと云ふのか。彼は以前こんな妄想を抱いたことがある。閑な神様が徒然の慰みにと、何でも造り得る全能の力を持ち乍ら、アミーバーを造つて苦み乍ら段々進化して行く世界を、續き物の小説でも見る様な心持で眺めてゐられるのではあるまいかと。然しそんな幼稚な考へはもうなくなつたがやつぱり人生の意義は主觀的にさへ不可解だ。幾億年の後には地球が冷却して人類も動物もあらゆる物は亡びるだらう。既に太陽にも黒い斑點が生じ始めたと云ふことだ。そして其の亡んだ地球に一体何が残るか。そして人生は最後に何を成し遂げ得るだらうか。彼の腦裡に何時頃かからか刺み込まれたお伽噺めいた幻想がある。それは白皚々たる雪に埋れた地球の様だ。最早あらゆる緑の色もくれないもない。只見ゆるものは雪の起伏だ。彼自身は或遊星から飛行器に乗つて地球探險に數人運來ののだつた。そして雪の中を歩いてるとふと谷らしい所に出る。谷を傳つて行けば、兩側は見上げる程高く聳わた雪の崖だ。然しよく見ると崖ではなくて高い家だつた。其の谷の様な森閑とした雪の街路には自動電車がひとり往つては歸り往つては歸りしてゐる。電車の中には白骨が累々として轉つてゐた。彼等は探險して歩く中にふと圖書館を發見して入つて見た。卓子の中央に記録が載せられてゐるので見ると、どうして字が解されたか分らぬが兎に角世界最後の記録だ。アミーバーから其の時に至る迄の概觀を記した後、「今や世界は亡びようとしてゐる。だが一跡今迄の歴史は何を物語るのか。そして何を成しただらうか。人生不可解の謎は代々何時か解かれることゝ空しく望まれ信せられて來たけれども、遂に今日余等は何を以て此の謎に答ふべきかを知らないのだ。若し大膽に云はしむるならば只一言（無に始まつて無に終る）と斷するの外はない。最早余の身体も凍りつゝある。手も段々動かなくなる。さらばよ、今は愈虚無に歸するのだ」と叙べ

てある。彼等は默然として一語だに發することが出来なかつた……。

然し人生を虚無だと獨斷するのは無謀である。現在の不完全な頭では未だ許されない領域なのだ。そして彼自身到底夫れに満足は出来ない。故に結局彼は不可解だと定めた。だが人生は事實である以上願はくば幸福でありたいが、嘗ては苦闘即幸福と觀じてゐた彼も何時の間にか夫れに満足が出来なくなつて幸福の青い鳥を只あてもなく求め懐れてゐるのである。然し一体其の幸福は果して彼に許されてゐるのだらうか。

姉が汽車で搖られて歸つて來た爲長子が流産したことがあつた。彼はもう相當に出來てゐる胎兒を見て涙を流し乍ら考へた、若し安全に生れたら人生七十年色々の苦樂を嘗めて墓穴に入ることだつたらうが、胎兒は生と死が一緒に來た、或は共に無かつたのだ。だが當然人生の波に揉れる筈だつた其の靈は一跡何處へどうなつて逝つたのか。然し或はこの方が幸福だつたかも知れない……。

彼はボンヤリ海を眺めてゐた。海は幾万年の昔より習慣となつてゐる反射運動を唯無心に繰返してゐるばかりである。動かないと思つてゐた沖の白帆はいつか左の方に移つてゐる。

……坂田の一生は實に數奇な運命の結晶だ。坂田が牧師の紹介で彼の父を頼つて來た時既に脚氣は進んでゐた。そして傘製造人として傭はれて二日目にはもう入院させられてゐた。彼は彼の家族の見舞を泣いて喜んだ。そして入院してゐた數ヶ月の間に到頭洗禮を受けた。見舞に行くどポツリ／＼小さい折から不思議な物語をした。父母に先だたれた兄と妹との三人は各親類に引取られたが、彼は食事の不足から盜みを覺て追ひ出されて乞食となつた。夫れから耶蘇教の孤兒院に暫くゐたが窮屈と飛び出して今度はある婆さんに引取られて行くど盜人の巢窟だつた。彼はかくて獄に半分を暮し乍ら廿五歳迄送つたが、或日教誨師の話を聞

いてる中愕然として己に歸つた。「俺はかうして一生を終るのだらうか」と彼は煩悶した。そして出獄後幼い折孤兒院を建て、ゐた女傳道師を尋ねたが分らなかつた。で牧師の世話で或工場に出てゐたが暫くして病氣の爲め止めて、獄中で傘製造の經驗があるので當地に來たのだと云ふことだつた。そして幼時に別れたまゝの兄妹を慕つた。で方々それとなく尋ね探して見ると不思議にも兄は全地の紡績會社に出てゐたので母が尋ねて行つた。事實は時として小説よりも奇である。丁度其の日兄は金持の妻となつた妹と共に生死も行衛も分らない弟を偲び乍ら父の命日を守つてゐる所だつたのだ。後彼は止められるのも聞かずに無理に退院して兄の家に移つた。彼が豊かでない兄夫婦の間の不和の種となつて到頭家出したのが其の二週間目。彼は或村役場で心臓麻痺で死んだ――。

……一躰彼は何の爲に生れて來たのか。そして何故にかくも苦しまねばならなかつたのか。此のひどい苦惱の後に只冷い永劫の虚無があるのだらうか。親鸞上人は現世との調和の上からでも來世は無かるべからずと説いてゐられるらしい。來世を信じ神の攝理を信じたら俺もどれだけ心を安らかにするな分らない。それに加へて俺は尙自己の空しさ貧しさを此頃痛切に感ずる様になつた。俺は偶像が嫌ひだが而も俺自身既に白蟻に犯された空虚な偶像に過ぎなかつたとは何たる皮肉だ。且又自己の醜い心を征服して眞の我、大我に生さんが爲の絶わざる苦闘にももうはどく疲れてしまつた。俺は動もすると總てのものをあるがまゝに肯定しようとする意氣地なさゝへ覺ゆることがある。絶対に自力を以て立たうとしてゐた心の奥には或空虚が崩して來た。俺は或力を堯望する、だが其の力は一躰何に求めたらいいのか……俺が神を信じようとする要求、之に祈る心を只弱い心だとして斥けると云ふのは果して正當なのだらうか。進化論は光が視力を生

んだと告げる。夫れでは此の要求も夫れと全様に實在の神が喚び起したのではあるまいか……。

彼は首を擡げて空を見た。眞向ふの西の方は少しはれて青い空が覗き出し、夕陽の放射が雲間からサツと海上に投げられるが、右手の東北の空には黒雲が群つてゐる。東北の雲は必ず擴つて来るから又雨かも知れない。氣味悪い鉛色の海は一とこり明るい放射光を受けて一種異様な趣を湛へてゐる。彼は立ち上つて足下の月見草を一輪折り採つて嗅いで見た。微にいゝ匂ひがする。彼は石でも投げる様に海に投げ込んだ、黄色い夢の様な花は満ち／＼た潮に浮いてほんやり空を向いてゐた。

「はかない月見草よ」と彼は呟いた。運命の神は俺の様な氣紛れな者ぢやあるまいかと又例の疑が萌して來た。彼は自分の左の手頸を右の手で固く握つてみた。段々に細つて來る様に思はれる。「醫學も腸の詰め更へが出來る位なげりや駄目だ、若し出來る様になつたら死刑囚の腸と俺の慢性腸加答兒のどを替へるのだ」と例の愚癡を繰返した、「腸が強くなつたら胸など何でもないんだ」然しさうりきんでは見るものゝ何時癒へるとも分らないことを思ふと堪らないほど淋しかつた。彼の頭にはもう例の根強い懷疑と寂寥とが巢くひ初めてゐた。

ふと人の氣はいがするので振り向くと、子守婆の八百屋の娘だつた。砂山の傾斜の小さい灌木の蔭に立ち止り乍ら「もう御歸りになる様にと云ふことでござした」と云ふ。……遊びに來てゐたものと見ゆる。「あゝ、歸らう。何だか少し寒くなつた様だね」と彼は努めて快活に答へた。西の空もいつか雲で鎖されて北方からは入海を越えてうそ寒い夕風が吹き出してゐた。彼は一寸身震ひし乍ら歸りかゝつた。

その夜は案の如く雨風がやつて來て彼の小さな家の雨戸を終夜ガタ／＼唸らせた。

「だがお母さん、僕は非共強い人間になりますよ。そして社會に出て大に活動してやりますよ。わゝごんな物にも負けはしない。運命にだつて何だつて………」と彼が何かしら昂奮して云ひ放つたのは其の嵐の宵のことである。

母は「神様におまへもお祈りする様におなりよ。神様の喜ばれる様にさへすれば後は神様がいゝ様にして下さるからねね、おまへも赤子の様に碎けた心にならなくちや困るねね」と稍元氣付いて見る子の顔をしげ／＼見乍ら應へた。

× × × × ×

翌日の新聞の三面記事には小さく「狂大尉の自殺」と云ふありふれた一報道が載せられてゐた。「豫備歩兵大尉何某は……(中略)……観音松原に首を吊りて事切れぬたり。多分發作的自殺なるべし云々」